

「あら、先生」

隨 想



横田庄三

お母さんとお参りかい」と話しかけてみたのだが、その後は全く話をしてくれなかつた。それでも私は心よく家に帰つた。

れ合いがなくては成立しないとよく言われることがだが、いざ現場に直面するとき必ずしもそうはないかず、わかつてはいるのだがつい逆な方向にのみ流れがちになる現実を否定できない。K子の変容を見るとき身のひきしまるものを感じている。

昭和五十五年十月の中ごろか、小春  
日和にさそわれるようい妻と、会津高  
田町雀林の法用寺にある三重の塔の拝  
観に出た。

ころ、下から上がつてくる三人の親子連れがあつた。母親とまだ小学校一年生になるかならぬかと思われる女の子と妹らしい三人がにぎやかに話しながら石段を上がつてきた。近づくに連れて「ハッ」とおどろいてしまつた。大きいほうの子が私の学校の一年生、K子であつた。

入学式以来 学校では校長にはもどろん担任にものを言わない、給食はとらず、運動もできず、上衣も脱げない。担任が話をさせようとすればするほど、口をとざし、自席にすわったま

ま、もちろん返事などしようともしない。休憩時間も、自席から離れようとしない。強制するといりますからだを硬くしてしまう。  
(しばらく過ぎてからわかったことではあるが、場面緘黙症とか、選択性緘黙症という症状とか。)

(しばらく過ぎてからわかつたことではあるが、場面緘黙症とか、選択性緘黙症という症状とか。)

そこで学校としては、機会あることには話し合い指導の手立てを講じ、いつまでもうでは、県の教育センターの相談も受けながら対策を講じたのだがあまり変化は見られなかつた。

その子供に、石段の途中で「あら、先生」と声をかけられたのである。母や妹とともにいたという気強さもあつたとは思ったのだが、初めて声を聞いたのである。

お母さんとお参りかい」と話しかけてみたのだが、その後は全く話をしてくれなかつた。それでも私は心よく家に帰つた。

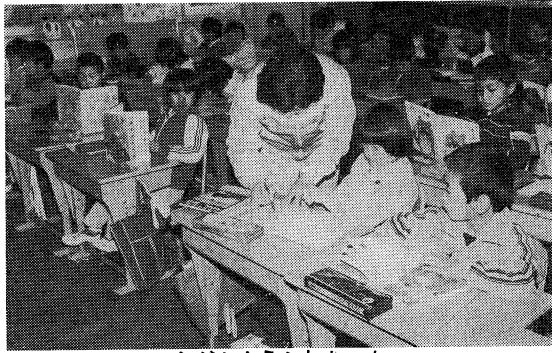
次の月曜日、校長と担任に昨日のことをさつそく話し、「K子ちゃんはきっと話すようになる」と三人で期待を強くした。

あれから一年、二年生になつたK子は仲間と一緒に何でもやるようになり元気に学校生活をおくつている。そんな姿を見て、K子ももう大丈夫といふ感を深くする。前書きが長くなつてしまつたが、K子の変容を思うとき、長い時間と担任教師のたゆまぬ努力と愛情がうささせたのかと思う。教育とは、はだかのつき合いであり、心のふ

る先生、そうした行動はクラブ活動やボランティア活動の経験を積んだ実績の上に立って初めて可能になると結ばれていた。

将来を託された若い先生たちの場合、いわゆる実績や経験はこれから積んでおおくはないと思う。若さでものをいさせて信じることに立ち向かう氣力が必要ではないだろうか。ややもすると引き込み思案となり、後からついていけばどうのような消極的態度が表れはしないだらうか……。

いまさら私ごときものがとやかくいう考え方など毛頭ないが、このごろのマスコミ等の報道から、教師の指導力の貧困さが原因でおこるとされている問題等を思うとき、つくづく考えさせられているこのごろである。



## 心がかようふれあいを